

ヴォルテールの恋人——デュ・シャトウレー夫人の生涯——

小倉金之助

ここに描きだそうとするのは、一八世紀の前半におけるフランスの一侯爵夫人——一般人の間には、巨匠ヴォルテールの愛人として記憶される科学者（一七〇六—一七四九）の生涯である。

フランスは、ルイ十四世の死（一七一五）によって、絶対王政によるながい間の束縛に対する反動時代に入った。やがて来るべき大革命への過程として、財政・経済上の社会的不安をはらみながら、一方では華やかな享樂の風がおこり、啓蒙文学の時代となって、科学的研究もようやく活発になつてきた時機であつた。

エミリー・デュ・シャトウレー夫人の場合には経済生活上の不安は、ほとんど認められなかつた。しかしそこには貴族階級の結婚と家庭生活、婦人の学問研究、婦人の自由などに関する、多くの問題があつた。革命前の貴族社会と初期啓蒙時代の最高知識を背景としながら、彼女は研究と恋愛を二つの焦点として、幾多の矛盾に苦しんだ。人間としての長所と女性としての短所とを、極度にあらわした矛盾に満ちた一生——そこには人を動かし、人を考えさせるものがないであろうか。

私はキュリー夫人などを読むたびに、いつでも敬服はするし、じつに学ぶべき多くのものを認める一方、いつも何か物足りないものを痛感する。自分で非常に詳しい調査をしたわけではないから、確かなことは断言できないが、そこにはあまりにも人間的弱点が描かれず、あまりにも立派すぎて、何か美しく飾られてい

るかのような感じが与えられる。そのために、私のような庶民にとっては、深く考えさせられたり、人生を暗示させられるものが、かえって少ないような気がする。

それで私は長所を尊重すると同時に、欠点をもはつきりさせる伝記が欲しいと思い、手元にある乏しい資料をもとにして、試みにこの一篇を書きあげてみたのである。

一

エミリー・デウ・シャトウレー侯爵夫人は、一七〇六年ル・トンネリエ・ドウ・ブルトウイユ男爵の娘としてパリに生まれた。名はくわしくいえば、ガブリエル・エミリー・ル・トンネリエ・ドウ・ブルトウイユというので、父の第二の結婚による四人の子供（男女二人づつ）の中の末っ子であった。ドウ・ブルトウイユ家は一六世紀の中ごろからパリに住んだ旧家で、エミリーの父は国王の侍講からイタリアへの特命使節となり、エミリーが生まれた二年後には、外国の使臣を国王や王妃などに謁見させる役目の官吏となった人である。

エミリーは幼少のころから注意深い教育をうけた。フランス語、ラテン語のほかは英語とイタリア語を学んだが、彼女は語学の才能に恵まれていたし、音楽にも秀でていた。幼い中に祖父から科学の初歩を教えられ、少女時代から特に数学と形而上学を好んだという。

さて一八世紀のフランスでは、子弟の教育といえば、もっぱら男子の方にばかり多くの費用をかけたので、良家の女子でも年ごろに達すると、選ぶべき道は結婚をするか修道院に入るかのほかはなかった。そういう意味で、一八世紀のフランス娘にとって、結婚はまったく人生への出発点であったし、また当時の結婚は女性に対する一種の解放とも考えられたので、エミリーもまたこの道を選ぶことにした。

そこで一七二五年十九歳のとき、彼女は十歳年上の軍人デュ・シャトウレー侯爵（フロラン・クロード・デュ・シャトウレー・ローモン）と結婚した。侯爵は軍人として出発し、一七二二年に国王付きの銃士となってから、だんだん出世して一七四四年には陸軍中將となった人であるが、侯爵家としては裕福な方でなかったという。エミリーは結婚してから宮廷に出入することができた。宮廷では王妃に近いところに床几（しょうぎ腰掛）をもつて、浪費的な生活を送るようになったが、それと同時に、夫婦の間がしっくりしなくなってきた。元来この二人は、はじめから互いに興味をもっていなかったのである。一方は重くるしい土臭い男なのに、一方は華やかな生活を生きたい気持で一ぱいな女であったし、それに軍人という夫の職業上、彼らは離れ離れの生活を送る日が多かったのであった。

エミリーは当時の習慣に従って、宮廷においても、またそのころ流行のサロンにおいても、たくさんの男友だちを作った。その中からドウ・ゲリブリアン侯爵（フランソア・ドウ・マルボア元帥の甥）を選んで、ひそかに愛人としていたが、その関係は彼らの愛情が破れるときまで秘密に保たれた。その後には、当時の輝かしい令名の高い人物アルマン・ドウ・リシュリュエ公爵（一六九六—一七八八）との間に、艶聞が伝えられた。公爵は漁色家としての一面をもつ人であるが、エミリーの“きびきびした、輝かしい冒険的な”点に引き付けられたのだと、いわれている。

その間に彼女は、一七二六年に長男を、その翌年に次男を生んだ。一七三四年に生まれた三番目の子供は早く死んだが、その子供が生まれる前から、夫の侯爵はもうまったく彼女に飽きてしまったのである。彼女は子供たちへは愛情を示したが、そのころの彼女は、知識的才能を通じてのほかに、男子の愛情を保つ仕方を知らなかったし、しかもそんな知的才能などは、粗野な夫にとっては無用のものであったのだ。そこで彼

らは一七三三年ごろからは、合意の上で別居をし、別々の生活を営んでいたのである。

この時代における社交婦人の常として、彼女も贅沢・享楽・気まま・浮薄・情事といった“遊び”から、免れることができなかった。けれども上流婦人のサロンは、ゴシップ的興味の雰囲気は彼女に適しなかった。宮廷の方がむしろ彼女の趣味にふさわしかったといえる。それに彼女は貴族階級としては、十分な富をもっていなかったし、美人ともいえなかった。きれいな眼と晴れやかな笑と、印象的な態度をもつてはいたが、柔軟な女らしい温雅さをもたなかった。こういう事情の下に、彼女は少女時代から好んでいた数学的・哲学的研究へと、精進しはじめたのであった。

読者諸君は、地球の形を決定する目的で、モーペルテュイ、クレーローその他の科学者たちが、一七三六年にフランス科学学士院から、北極に近いラプラントに派遣されて、径線の長さの測量を行なった、という出来事を聞いたことがあるだろう。あのモーペルテュイ（一六九八—一七五九）と、クレーロー（一七二三—一七六五）こそ、エミリーにとって最良の師友であったのだ。

モーペルテュイは一七三〇年ごろから、二、三年の間、彼女に数学を教えた。彼は彼女にとって最初の師であつたばかりでなく、多年の間文通をつづけ、彼女から最も信頼された科学者であつた。クレーローにたつては、彼女の晩年までの指導者であつた。^①一七三三年ごろの彼女の手紙には、数学や物理のことがいろいろと書かれている。ここにモーペルテュイ宛の手紙の一部を抜いてみよう。

「昨夕はあなたの講義を有効に利用しました。……今日は在宅しますから、できますならお出になつて、無限級数を n 乗することを教えて下さい。……明日は六時まで外出しませんから、四時にいらっしゃれ

ば、二時間勉強できます……」(一七三三年)。

「私は数日前から、再び幾何をやりだしましたが、前にやったことをちつとも忘れていないので、なにも新しいことを覚えません。……じつはギスネー^②は自分ひとりでは全然わからないのです。あなたのほかには、私に愉快に勉強させてくれる人があろうとは考えられません。他の人なら、茨ばかり見出す道の上に、あなたは花をまきちらしてくれます。あなたの想像力は、もつとも乾燥な事実を、正確と精密を失わせることなしに、どう飾るかを知っているのです」(一七三四年)。

モーペルテュイが教授を怠っていると、エミリーは彼がよく出掛けるカフエー・グラドローに、彼を迎えにいったという。彼女は計算が上手であった。あるとき九桁の数で割るのを、全くの暗算でやって、傍にいた数学者を驚嘆させたことがあった。

このように夫と別居して、数学・科学の研究をつづけていた際に起こったのが、ヴォルテールの事件であった。

註

(1) クレーローはモーペルテュイの紹介で、エミリーの師となったが、その初めの時期は不明である。数学教育史の上で有名な、クレーローの『幾何学初歩』(初版一七四一年)は、クレーローが彼女への講義をまとめて印刷したものだとも、また多くの人々に幾何学の基本概念を得させるために、彼女がクレーローに勧めて書かせたものだとも伝えられている。

(2) ギスネーというのはモーペルテュイの旧師で、『幾何学への代数の応用』(初版一七〇五、再版一七三三)の著者である。この書物のはじめに、代数計算の物差(函数尺の意味であろう)の説明と多くの付図が載っているとのことだが、私は原書を見る機会をもたない。

二

ヴォルテール（一六九四—一七七八）は一七二八年ごろから、ドウ・リシュリュー公の友人であった。それは彼がバステイク牢獄を出て、『ウーディフ』の劇がテアトル・フランセー座で成功したところからである。その後、しばらくイギリスに滞在し、一七二九年に帰国の後は啓蒙家として大いに活躍した。論文集『哲学通信』または『イギリス便り』（一七三二—一七三四）によって、彼はイギリスの政治・社会を讚美し、フランスの専制政治や貴族・僧侶の階級的専権に対して、劇的な攻撃をはじめたのである。

ヴォルテールは——多分モーペルテュイから聞いたのである。——エミリーに会う前、一七一三年から、確かに彼女の学才を知っていた。それから後、彼は詩の中で彼女を讚えているし、また彼女とドウ・リシュリュー公との関係も知っていて、一七三三年にはこういう詩を彼女に贈っている。

耳を傾けなさい、尊いエミリーよ。

あなたが美しいので、人間の半数は

あなたの敵になるでせう。

あなたはすばらしい天才をもつ、

人はあなたを恐れ、あなたの優しい友情は

信用され、そしてあなたは裏切られるでせう。

単純で率直な連盟の中でこそ

あなたの徳義は犠牲にされないでせう。

われわれの崇拜する方へ、中傷を恐れなさい。

この詩を捧げられたエミリーは、まもなくヴォルテールとはじめて会って、新しい恋愛に陥った。そのころの彼の詩には、次のような数式入りのものさえある。

疑ひもなくあなたは名高くなるでせう。

あなたが夢中になつてゐる

代数の大きな計算によつて。

私は決心してわが身を捧げませう。

けれども、ああ、“ $A + D - B =$ 私はあなたを愛する”

とは、ならないのです。

ところが一七三四年に『イギリス便り』は政府の命令によつて焼きすてられ、ヴォルテールは反逆者か売国奴と見られて、捕縛されそうになつた。彼はにわかにはパリから脱出した。(そのとき出版者はついに捕縛された。)ヴォルテールと連絡をとつていたエミリーの頭に突然ひらめいたのは、彼を“シレーにやつては?”ということだつた。シレーならば国境にすぐ近い所なので、いざという場合にはすぐ国境を越えればよい。そこには彼女の夫デュ・シャトウレー家の人たちが、数世紀にわたつて住んだ城があるのだ。話は急にまとまつて、ヴォルテールは九月に、エミリーは次男を伴つて十一月に、シレーの城に赴くことになつたのである。

シレーの城はシャンパニユの平野の中で、ローレーヌに近いシヨールモンの付近にある。多年の間、人の住

まなかつた古城には、今や修繕を施され、図書室や博物標本室などのほかに、物理実験室が設けられ、師父ムッシノーが排気鐘や望遠鏡その他の機械を整理する任に当たることになった。

こうしてエミリーとヴォルテールの新生活がはじまった。そのとき彼は四十歳、彼女は二十八歳であった。当時の模様を知る人々の記録には、この城のなかで「一人は詩をつくり一人は三角形を描いた」「デュ・シャトウレー夫人は書物と書きつけた紙の真中で、午前中の大部分を過ごした。」「彼女の机は書物と実験器機でいっぱいになっていた」「エミリーは昼間に研究をしたばかりでなく、夜も仕事をつづけて、朝の五時か六時までは床に入らなかった。」などと記されている。彼女はときどき愛馬に乗って、ながい遠乗りをした。夕方の時間には主に談話をした。ヴォルテールの詩の中には、

けれども私は夕べになると

.....

われわれの天文学のエミリーを見る。

古くて黒い前垂を掛け、

インキで汚れた手で、

彼女はコンパスと

彼女の計算と眼鏡をおく。

というのがある。

かようにしてヴォルテールはエミリーに危難を救われ、保護された。もうこうなると、すでに愛情を失って

別居をしていた夫の侯爵も、妻とヴォルテールの共同生活を、いやでも黙認しなければならぬようになってしまった。

元来エミリーの活動的な精神と単純で自然的な性格は、仕事と“遊び”との間に矛盾をきたし、苦悶をつづけていたのである。パリには、空しい快樂やサロンの掛引に狂する社交生活があったが、このシレーでは、何物にもとらわれずに、仕事に没頭することができた。彼女はヴォルテールと共に“地上の樂園”の静寂さを歓迎迎えた。彼の日記の中には、次のように書きつけられている。「私は地上の樂園にある幸福をもった。この樂園にはイヴがいるし、私もまたアダムになるのを不便としなかった。」

ヴォルテールはシレーで多くの仕事をした。詩の『俗物』（一七三六）、小説の『ザディグ』（一七四一）、劇の『アルジール』（一七三六）、『メロップ』（一七四三）、ニュートンの学説と思想を伝えるに功労のあった『ニュートンの哲学』（一七三八）などは、ここで書かれたし、歴史の大作『ルイ十四世の時代』を書きだしたのも、ここにおいてであった。エミリーもまた研究に没頭した。『物理学の学校』を著わしたり、ニュートンを反訳したり、科学上の多くの仕事をした。（これについては改めて後に述べよう。）

シレーにはしばしば学者や文人や社交婦人たちの訪問があった。科学ばかりに限ってみても、スイスの数学・物理学者「サミュエル・クーニグ（ドイツ流にえばケーニヒ、一七二一—一七五七）は、モーペルテュイの紹介で、一七三八年から二、三年の間、エミリーの家庭教師となった。モーペルテュイは、スイス、バーゼルの教授ジャン・ベルヌーイ・フィス（一七二〇—一七九〇）を伴って来た。クレローはしばしば彼女の研究を助けにやってきたので、彼女はシレーに彼のために科学器機室を設けたくらいである。一七三六年イ

タリア人アルガロツティが、『婦人のためのニュートン』（一七三七）をイタリア語で著わすために、シレーを訪れたときには、エミリーはイタリア語で立派に対応することができた。一七四三年にはニュートンの注釈を書いて名をあげていた、フランソア・ジャッキエ師（一七一―一七八八）が、ローマからやつてきた。シレーでは客を慰めるために、時々オペラをやり、エミリーは自分で歌った。彼女とヴォルテールとは、ときどき別々に旅行した。けれども同伴で、ブラッセルやリールなどに滞在したこともあった。

かようにして彼らはおよそ十三年の間、シレーの生活をつづけながら、互いにのびのびと大きな成長を遂げていった。彼らの名声は次第に高くなり、知識人や社交界の好奇心の的になった。プロシアのフリードリヒ二世（いわゆるフレデリック大王（一七二―一七八六）即位は一七四〇）が、彼らに与えた手紙の中にはこう書かれている――「あなた方は、何という賞讃すべき、そして独特な人たちでしょう。あなた方を知っているすべての人々の不思議は、日に日に増していくのです。」

ヴォルテールとエミリーは、どちらも本質的に知識人であり、エゴイストであった。彼らはあくまでも知識を追求した。シレー生活の前半では、ヴォルテールがニュートン派で、エミリーがライプニッツ派であったのも面白い。彼らは人間の作った規則に縛られることを嫌い、自然の法則を理解することに熱中し、啓蒙のために自然の法則について書いたが、一般民衆をばはなはだしく無視し軽蔑した。――こういった点で、彼らは典型的な初期啓蒙主義者であった。

しかし彼ら二人の間には相違の点も多かった。ヴォルテールはより空想的・独創的であり、他人の過失に對して寛大であったが、エミリーはより精密で辛抱がよく、考えが組織的であった。彼らは時々つまらない

ことから喧嘩をした。「彼らは風と日光と大きな緊張の周期をもった。しかし結局彼らはどこまでも愛人であり、そして彼らは知識的にお互いを必要としたのだ」とは、彼女の伝記作者フランク・ハメルの言葉であるが、まったく適評かと思われる。

彼ら二人は、お互いに堅く結びあつて、成長を遂げていった。ヴォルテールが科学知識において、エミリーに負うところが大きいと同時に、彼女もまた彼から芸術と歴史とを教えられた。ヴォルテールの大作『国民の風俗と精神についての論文』（一七四六―五六）は、彼女に歴史的興味を与えるために、あるいは、彼女の科学的精神を満足させるために、筆を執りはじめたものであった。

三

そのころローレーヌのナンシーに近いリュネーヴィルに、亡命中のポーランド王スタニスラス一世——當時はバールとローレーヌの元首となっていた——の宮廷があつた。それは美術家や文学者や社交人にとつて、きわめて名高い、特色ある宮廷であつた。ヴォルテールとエミリーはスタニスラス王の招待をうけて、一七四八年二月リュネーヴィルの宮廷に赴き、五月まで滞在した。それはヴォルテールが五十四歳、エミリーが四十二歳のときであつた。

ちょうどその時、リュネーヴィルでは、ドウ・サン・ランベール侯爵（二七二一―一八〇三）という軍人が、宮廷の華とよばれるドウ・ブツフレール侯爵夫人の愛人となつていた。ドウ・サン・ランベールは、後に無味乾燥な『季節』という詩集を公にしたの^②と、社交界に出入してしばしば恋愛事件を起こしたほかには、業績のほとんど知られていない人間である。ところがエミリーは、ドウ・ブツフレール夫人の愛人とも知らず

に、自分より十歳ばかりも若いこの男に、熱烈な愛情をよせるにいたったが、それは彼女自身の将来を犠牲にし、多年來の愛人さえも裏切った、狂氣のようにはげしい恋愛であった。

かれらの関係は、やがてドウ・ブッフレル夫人およびヴォルテールの知るところとなつて、気まずい事件がしばしば起きあがつた。しかしヴォルテールとエミリーが宮廷を去つてからも、ナンシー付近への旅行中、ドウ・サン・ランベールとの間には、微妙な三角関係がつづけられた。しかもその間に、計画的なエミリーはスタニスラス王に運動して、自分の夫デュ・シャトウレー侯を、ポーランド王の元帥にすることに成功した。彼女はそれによつて、リュネーヴィルかナンシー付近にいる、ドウ・サン・ランベールに近づく機会を多くしようとしたのである。

その年末にパリにおいて、ヴォルテールはエミリーから、やがて母になること告げられた。彼ら二人の間には驚くべき合議が成立した。彼らは、いま元帥となりリュネーヴィルにいるデュ・シャトウレー侯爵——エミリーとは十數年來別居しているはずの——に、侯爵自身の子供であると承諾させ、その上に、ドウ・ブッフレル夫人（子供の実父ドウ・サン・ランベールの愛人）の力を借り、人目につかないように、（シレーやパリでなく、）リュネーヴィルで産をさせようというのである。それは当代の最高頭腦、ことに「ヨーロッパの精神的中心」と呼ばれているヴォルテールにとつて、何という皮肉な悲劇であつたらう。

それから凡そ半年の間、彼ら二人のパリ生活がつづいた。今やエミリーは完全に社交界を見捨てた。彼女はクレロー以外には、ほとんど友人に面会しなかつた。ヴォルテールが悲劇の創作に専心する一方、エミリーはすでに數年來従事してきたニュートンの『プリンキピア』の翻訳のために、クレローの助けを借り

ながら、一切の力を集注した。

妊娠は彼女に対して精神的に大きな痛手を与えたばかりではなかった。彼女は年とつてからの産に際して、何か凶事が起こるように感じた。彼女は恐怖と前兆を忘れるためにも、仕事に没頭しなければならなかった。ドウ・サン・ランベールへの手紙の中で、彼女は訴えている。「私はもはや十分に罰しられたのです。けれど私は理性に対しては、より大きな犠牲を、まだ払っていませんでした。私はどうしても、仕事を完成しなければならぬのです。それには鉄のように丈夫な体が必要とするのですけれど……。」

彼女は朝は九時に起き、午後三時まで仕事、三時にコーヒー、四時から十時まで仕事、それから軽い夕食、十二時までヴォルテールと談話、それから朝の五時まで仕事をつづけた。そして『プリンキピア』の本体ともいえる部分は、見事に完成を告げたのである。

一七四九年七月になって二人はパリを出て、シレーに立ち寄り、二週間ばかりの後にリュネーヴィルに赴いた。そこで彼らはドウ・サン・ランベールに出会ったが、彼女の情熱に引きかえて、ドウ・サン・ランベールの心はもう全く冷淡になっていた。

九月のはじめに女の児が生まれた。それから一週間も経ない九月一〇日に、二日病んだばかりで、夫のデュ・シャトウレー侯、ドウ・ブッフレール夫人、ヴォルテール、ドウ・サン・ランベールらに見守られながら、エミリーは死んでしまった。死の原因は不注意からであった。彼女は焼けつくような熱のあるとき、一ぱいの凍ったハタンキョウ水を飲んだのである。

かようにして『フランスの陸軍中将・ポーランド王の元帥・デュ・シャトウレー侯爵の夫人』エミリーは、短い一生を閉じたのである。葬儀は彼女の地位にふさわしいものであった。スタニスラス王は高官たちを遣

して哀悼の意を表し、リュネーヴィルの主な市民が参列した。

註

- (1) このドウ・ブッフレル夫人は、後にリュクサンブール元帥の夫人になって、元帥とともに、ジャン・ジャック・ルソーの後援者・同情者となった女性である。
- (2) ドウ・サン・ランベールはこの詩集(一七六九年出版)をドウードウトー夫人に捧げている。ドウードウトー夫人というのは、一七五六年ごろジャン・ジャック・ルソーが熱烈な片恋を寄せた夫人で、すでにそのころからドウ・サン・ランベールの愛人であった。かようにドウ・サン・ランベールは、デュ・シャトウレー夫人については、ヴォルテールの恋敵であり、ドウードウトー夫人については、ルソーの恋敵であった。しかもヴォルテール、ルソーの二大巨匠は、恋愛においては共に、ドウ・サン・ランベールに負けたのである。

四

さて、デュ・シャトウレー夫人を伝えるためには、ぜひとも彼女の科学的業績に触れなければならない。けれどもここでは、ごく常識的で簡単な説明だけに止めよう。

一七三七年、フランス科学学士院では、「火について」の懸賞論文を募った。面白いことに、科学研究への関心において、エミリーの影響を受けていたヴォルテールは、長い間考えぬいた結果、一つの論文を提したのである。ヴォルテールの理論に不満を感じたエミリーは、締切の間際になってから、彼に告げずに自分でひそかに解決しようとした。そこで一週の間、毎日一時間ずつしか眠らないで、「火の性質とその伝播について」と題する論文を書きあげた。結果は翌年のはじめに発表されたが、賞はスイス生まれの大科学者オイラー

たちの間に分配され、彼ら二人は賞に入らなかつた。けれどもヴォルテールとエミリーの論文も、相当の価値あるものと認められたので、どちらも当選論文の次に印刷して掲載された。

ところが、この論文の著者たちは、一方は地位の高い婦人であり、一方はヨーロッパ最高の思想家・芸術家なので、世間的にすばらしい興味を呼んだ。エミリーはそのころまだ王子であつたプロシアのフリードリッヒから、賞讃をきわめた手紙をもらったのである。一九世紀の中葉になつて、有名な科学者のアラゴーは、「エミリーの研究は、当時の物理学者に知られたすべての性質に、立派な一つの描写を与えたばかりのものではなかつた。そこにはいろいろ新しい実験の企画を見出すことができる。その中の一つは、後にイギリスのハーシェルが受けついで、発展させたものである。」と評価している。

エミリーの第二の著述は、『アンステイテユシオン・フイジック物理学の学校』（初版一七四〇年）という単行本で、物理学の基礎または原理を説いたものである。彼女はこれを自分の息子たち（十三歳と十四歳）に捧げた。――

「わたしの子供たちよ、あなた方は幸福な年ごろです。それは精神が考えることをはじめて、しかも、感情がまだ騒ぎださない時期です。こういう年ごろにおいてこそ、立派に教育されなければならぬのです……。」

しかしこの時代にはまだ本格的な物理学ができあがつていなかつた。彼女はこの書物の中で、おもにライプニッツの哲学を説き、時間、空間および力について論じたのである。そのころは力を測るのに、質量と速度の積「運動量」であるか、それとも質量と速度の平方の積「活力」であるか、そういう議論が盛んで、知識人が二つの党派に分れていた時代である。^①前者はデカルトに始まり、それからニュートン、一段降つてヴォルテールなどによつて、後者はライプニッツにはじまり、その一派とエミリーなどによつて強く主張された。

エミリーのこの書物は版も重なり、ドイツやイタリアでも反訳されて、好評を博した一方、反ライプニッツ派（たとえばフランス科学学士院の終身幹事ドウ・メーランなど）から批判されて、論争をよび起こしたのであった。

ところがその後エミリーは（多分一七四三ごろから）、ライプニッツから離れて、ニュートンの説を信ずるようになり、ついにニュートンの名著『自然哲学原理』（いわゆる『プリンキピア』で初版は一六八七年）を、ラテン語からフランス語に反訳しようと企てるにいたった。元来ニュートンは自分で発見した微積分の助けによつて、理論を築きあげたのだが、書物として発表する際に、わざわざ古代ギリシアの幾何学風に説明し、かえつて解りにくい本ができあがったのである。そこでエミリーはクレローの意見に従つて、ニュートンが研究当時の姿に還すことにした。『太陽系の主要問題の解析的解決』と題し、各章にわたつて、一切の計算を明示し、クレローの校閲を経たのであった。（この反訳の二巻は、彼女の死後一七五九年に出版された）。この反訳は科学史家によつて、「もつとも尊重すべき注釈に富む」と評価されている。

天才的数学者クレローは、快活な好男子で社交界の花形であった。シレー城から、一友人に送ったヴォルテールの手紙の中には、「……あの世界最大の数学者の一人で、愛すべき人物が、やっとパリに帰つていった。私はある日彼らの仲のよさを妬んで、度を越した癩癩をおこした、……」というのがある。また彼女の侍者の回想録にそれより何年かの後、クレローが『プリンキピア』の注釈を校閲していたとき、ヴォルテールが大変な嫉妬をおこした（第三者からみると、まるで喜劇のような）事件が記されている。いずれにしても、難澁をきわめたニュートンの反訳・注釈はエミリーとクレローとが、情熱で結ばれた協力によつて成功したのだといえよう。私はフランスにニュートンを紹介した功労者として、エミリーこそは、ヴォルテールと

ともに、第一に挙げなければならない人物だ、と確信する。こういう意味で、フリードリッヒ大王が、かれらを「ニュートン・ヴィナス」・「ニュートン・アポロ」と呼んだのも、はなはだしい誇張ではないと思う。公平に考えてみて、デュ・シャトウレー夫人には独創力が少なかったであろう。しかし一九世紀のはじめに至るまで、どんな意味においても、卓抜な女性の数学者といえるものはきわめて少なかったことを思わねばならぬ。科学史家ルビエルは女性の数学者を数えあげて、

「第一に四世紀のヒュパティア（アレキサンドリア）。第二に、一八世紀前半のエミリー・デュ・シャトウレー。第三に、つづいて直ぐに現われたマリア・アネシ（イタリア）。第四に、一九世紀のはじめのソフィ・ジェルマン（フランス）」

と述べているし、気高い心情の大数学者アンペールは、「デュ・シャトウレー夫人は数学における天才である」と、讃えている。

註

(1) すなわち *mm* か *mm²* である。¹⁾ *mm²* (エネルギー) の概念は、一九世紀に入ってから、コリオリス (一八二九) によって、はじめて導入されたのであった。

五

かような科学的著作のほかに、エミリーには、『幸福についての反省』、『神の存在について』などの小著があるし、また『デュ・シャトウレー夫人の手紙』が、アッスという人によって編集されている。これらの資料を通じてわれわれは、エミリーの思想や性格を読みとることができるのである。

彼女はヴォルテールと同じように、自然デイズム神教の信奉者であった。同時に彼女は感覺主義者であり、快樂主義者であった。彼女は大胆に率直に、「われわれはわれわれの快い感覺を得させることのほかには、この世でなすべき何物をも持たない」と述べている。

彼女はじつに自然で、単純で、率直であった。思い切りがよく、そして論理的であった。他人が賛成しないことでも、正しいと思つたことは実行した。(實際一七三四年にヴォルテールの危難を救つたものは、かれの同志や友人たちではなくて、彼女であった。)彼女は真理と正義を愛した。そして人間が犯罪を罰することを望まなかつた。他方、彼女は自分に反抗して書かれた冊子を読まなかつた。また彼女は女性の學問研究を激励した。彼女は「ある女性が、十分すぐれた魂をもつて生まれたと自覚したとき、彼女が境遇や身分から強いられる一切の圧迫と束縛から逃れて、心を慰めるものは、學問研究のほかにはないのである」と、強く訴えている。

その半面、彼女には輕佻な点があつた。何よりも演劇が好きで、操り人形を見ては大笑いしたり、自分でヴォルテール劇の一役を演じて悦んでいた。それに首飾や宝石に対する趣味が、あまりにも強かつた。(ヴォルテールからの贈物には、そういう宝石類が多かつたという。)ヴォルテールにはこんな詩もある。

この美しい魂は、あらゆる工合に
刺繍をした織布なのだ。

その精神はたいさう哲學的で
その心は身ボンボンの飾りを嬉しがる。

こういう面で——ヴォルテールとの交情への嫉妬もあり、彼女はその時代のある人々、特に気位の高い社交婦人たちから、ずいぶん酷評をうけ、「信仰なく、操行なく、廉恥心のない女」と罵られた。デュ・デッファン夫人といえば、有名なサロンの主人公として、多くの学者や知識人を集めた有力な女性であるが、彼女のエミリー観をきくがいい。——「背の高い、頑丈で、しなびた女。狭い胸、大きな手、巨大な足。ひどく小さい頭、薄つぺらな顔、尖った鼻、小さな海緑色の眼。暗い色の皮膚、桜色の顔、平たい口、……これが、あの『美しいエミリー』なのです。髪の毛、宝石の装飾の装い方は、なかなか贅沢でした。けれど財産以上に立派に見せたいばかりに、彼女は肌着のような必需品を着けないで、贅沢品を求めなければならなかった。」

こういう毒舌よりは、少し後の時代の文学者ルイズ・コレ夫人の次の描写の方が、むしろ真相に近いのかも知れない。——「デュ・シャトウレー夫人は大きく、すらりとした体で、茶色の髪をもっていた。私は夫人が二十歳のときの大そう美しいパステルを見たことがある。そこでは夫人は白の総ふさでかざった藍色のローブを着け、少し粉をまいた輝きのある髪、濃い眉の下に輝く大きな眼、微笑をたたえた表情的な口をもち、しなやかでほっそりした胴は、絹の胴着の中に開いていた。——もと彼女はかようであったし、あんなに短い生涯の終わりまで、かようであった。なぜかというに、彼女の美はことに力と優美とを混じた、いきいきした特徴の中にあつたのだから。」

エミリーの知性には、哲学的諸観念と共に、革命に先だつ不安の精神を伴っていた。彼女は科学者で思想家であると同時に、いわゆる「貴婦人」で術学的であり、しかも浮気女らしい点さえもあつた。——一口にいえば矛盾の女性であつた。

恋愛についても矛盾があつた。ヴォルテールとの関係は、恋愛と知的友愛との、十五年にわたる美わしい

結合である一方、ドウ・サン・ランベールに対する彼女の逆上^のせ方は、彼女の死によって終わりをつけた、狂気じみた野性的なものであった。

このような矛盾する情熱は、彼女をして理性と感情との極端な力を発揮させた。彼女は生涯を通じて夢中になれる、二つの興味の焦点をもったのである。——研究と恋愛と。

あのデュ・デッファン夫人は「エミリーの一生がめざましかったのは、全くヴォルテールに負うもので、彼女を不朽にするものは彼の力なのです」と酷評したが、当人のヴォルテールは、フリードリッヒ大王に送った手紙の中に、「彼女は偉大な人間でした。ただ一つの欠陥は女であったことです。」と書いていた。そして次の哀詩をつくったのである。

宇宙は崇高なエミリーを失った。

彼女は歓楽と芸術と真理を愛したのに、

あの魂と天才を彼女に与へた神々は

不朽性の外は護つてくれなかつた。

デュ・シャトウレー夫人の死から二年の後に、デイドウローやダランベールの『百科事典』の出版がはじまり、啓蒙思想が大いに普及してきた。死後の十三年には、ルソーの『社会契約論』や『エミール』が現われた一方、三十年目にはヴォルテールが死んだ。そしてニュートンの力学理論が、ラグランジュの『解析力学』によって、すでに一応の完成を見せた翌年、——ちょうど夫人の没後四十年目には、ついに大革命の嵐が荒れ狂いはじめたのである。

(一九五二・五・二七)
〔中央公論〕一九五二年七月号所載)

- 『読書雑記』（小倉金之助著作集）第八巻、勁草書房、一九七四年二月）所収。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。ただし、引用はそのままにした。
- PDF化には`LATEX2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。